

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Development of the Speech of Infants, Especially on the Learning of Zyosi (Postpositions)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永野, 賢, NAGANO, Masaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001725

幼児の言語発達について

—主として助詞の習得過程を中心に—

永野 賢

幼児の言語形成期は、平均して満3歳ごろから始まるといわれる。それは、発音・語彙・文法の各能力についていわれることであるが、文法能力については、たとえば、牛島義友・森脇要阿氏の研究(注1)によれば、統計的に見て、2歳児ではほとんどすべての種類の活用が可能になり、3歳児からはその頻度もほとんど一定してくることが観察されている。活用の能力は、2～3歳のころに著しく発達することが認められるわけである。また、わたしが自分の子どもについて観察したところでは、活用の変形(誤り)は、2歳の前半から現われはじめ、3歳の後半にかけて多発し、4歳にはいると、目だたて数を減ずるとともに、正誤の意識もはっきりしてくると観察された。(注2)つまり、活用の変形は、活用の能力が著しく伸びてきた年齢に現われはじめ、その能力が完成に近づくと年齢に影をひそめていくと見ることができるといえるわけである。

ところで、いったい、言語形成の開始時期——言語能力の固まりはじめる時期——である満3歳に至るまでの間に、幼児は、どのようにしてことばを習得していくか。それを、助詞の習得過程について見てみようとするのが、この論文の趣意である。

観察の対象と記録法

観察の対象は、わたしの娘ふたりである。

○長女(ますみ) 昭和25(1950)年10月27日生。知能指数130(5歳5カ月当時、愛育会測定)。

○次女(はるみ) 昭和27(1952)年3月1日生。知能指数116(5歳2カ月当時、愛育会測定)。

(家族は父母と4人暮らし。同居者なし。なお、この論文の中では、家族関係を子どもの立場からさすこととし、わたしを「父」、妻を「母」、長女を「姉」、次女を「妹」と記す。実例はカタカナで記し、必要に応じて、それに関係のある会話をひらがなで記すこととする。また、実例のあとの数字、たとえば「2・1」は、その例が2歳1カ月の時のものであることを意味する。)

○記録は、わたしと妻とが協力して行い、一定時間内のことばを全部記録(筆記および録音)する方法と、いろいろな意味で問題となる例を随時拾い集める方法を併用した。

○本論に主として引用するのは、このうち、妹の満2歳0カ月から満3歳0カ月ま

での13カ月間、毎月延べ5時間ずつとった記録に現われた例である。
○記録はカタカナで取ったため、音声は必ずしも厳密には写していない。

言語習得のしかた

幼児の言語習得は、まね（模倣）と類推によって行なわれる。

まねとは、環境への適応である。言語の原初形態である擬声語でも、周囲の人たちの使う、社会慣習としてきまったものをまねることによって習得する。姉が3歳のころ、わざと普通一般の擬声語を教えずにいろいろな音を、自分の聞こえるとおりに音声描写させる実験を試みたことがあるが、次のように独創的な答をした。（記録の中からいくつかの例を記す。）

- カラスの鳴き声……………ア—ア—
- トウフ屋のラッパ……………フ—フ—
- ウマのひずめの音……………カ—カ—
- ウドンを食べる音……………ニ—ニ—
- つけ物のカブを食べる音……………カ—カ—
- 雨だれの音……………タ—タ—

これは、語囲についても、文法形式についても、同じことがいえる。

第2の原則の類推とは、類化連想の能力の発揮である。

幼児の連想力は驚くほど強いものであるが、言語体験の少ないこの年齢では、似た音形式のものをただちに思い起こすことが少なくないことによっても、それは知られる。たとえば、積木の箱のふたにカバの絵が書いてあるのを、何かと聞くので、「カバ」と教えたら、「オニイチャンガ オムツカバニ ミテマ スネー（姉、2・4）」と言ったり、「たび（足袋）」の絵を書いてみせると、「ア カイクツ—、ミールタバニ、カンガーエルー、ノタビガアル（姉、3・2）」と言ったりする。この連想力が類推力を支え、自由奔放な造語をすることもある。たとえば「—ヤサン」という型を覚えると、床屋のことを「アタマヤサン」、福引のくじを引く所を「ガランガランヤサン」、家具屋のことを「クルマヤサン（うば車を買ったので）」（以上、いずれも姉、3・1）といったりする。

文法能力の獲得にあたっては、このまねと類推との二つの力が働いていると見られる。たとえば、活用についていえば、幼児は、はじめのうちは、ひとつ

ひとつの活用語の特定の活用形を個別的に覚える。これは、まねの段階である。それらが積み重ねられていくにつれて、次第に活用の法則（活用系列）が頭の中に形づくられ、いろいろな語に適用する能力が身についてくる。これは類推の段階である。その類推による適用を誤ったものが、前にも述べた変形となって現われるわけである。たとえば、「来る」を五段活用に類推して、

○チョット ジテンシャデ クリマ^レスネ。(妹, 2・8。正しくは「きます」) といったり、「さす」を下一段活用に類推して、

○パパ、カササセテ^レチャ^レダイ。(姉, 4・2。正しくは「さして」) といったりする。(註3)

このようにして次第に能力が伸び、固定していくわけである。

助詞についても、事情は同じである。たとえば、「も」が同類共存の意を表わすことばであることがだいたい理解できると、これを次のように誤って適用することがある。

○姉「コレワ？」
父「それはスマレ」
姉「コレモワ？」
父「それもスマレ」(姉, 3・2)

これは、「——ワ？」という質問形式の習得と、その誤った適用とも見られるのであって、たとえば、朝、父の出勤を送りに表の道まで来たとき、長い靴べらをつえの代わりにするので、「どろでよごれるからよしなさい。」という

○インノタクサンアルトコロナラ^ウ？(姉, 3・4)
という。そのほか、

○モットアッタカクナッタラ^ウ？(姉, 3・4)
○ジャア、コッチニヤレバ^ウ？(")
○コッチニイルト^ウ？(")

など、例は多い。

未習得の表現形式の使用にせまられたとき、既習得の形式を適用した例としては、

○パパ オムカエニ イコオト オモッテ、カニッテ キチャッタワネ。(パパをお迎えに行こうと思っていたら、パパが帰ってきてしまった、の意。姉, 2・7)

などをあげることができる。

以上のように、幼児は、まねと類推により、言語を習得するのであるが、類推にあたっては、正しい適用と誤った適用とがあらわれ、そのゆれが次第に減少しつつ言語能力が固定すると考えられるわけである。

ところで、以下に、わたしの子どもの言語発達の継続観察記録にもとづいて、助詞の習得過程を述べてみようとするわけであるが、もちろん、はじめは、

- パイ アル キ。(木がいっぱいある、の意。妹、2・0)
- ドロ ツイテタ。(どろがついてた。妹、2・2)
- ココ オク。(ここに置く。妹、2・2)
- モオー ナクンダ。(モオーとなくんだ〔牛が〕。妹、2・1)
- アレ ツケル(あれ〔薬〕をつける。妹、2・2)
- マミミ タイタイ エンエン ネーエ。(ますみがいたいいたって泣いたねえ。姉、1・9)

などのように、助詞の欠除する段階がある。この、助詞の欠除と、助詞の正用と誤用とのゆれの実態を追いかけていって、どのように固まるかを記すのが完全な記述といえるわけであるが、ここでは、紙面の制約もあるので、どんな助詞が、いつごろ使われ始め、いつごろまでに多用され、固定するようになるかのあらましを記録するにとどめることとする。記録の範囲は、前に述べた、妹の満2歳0カ月から満3歳0カ月までの13カ月間の事例にもとづく。

助詞の習得過程

助詞を、終助詞、格助詞、接続助詞、副助詞の4つに分け、それぞれ語別に習得使用の実状を見ることとする。各分類の中では、初出の早い助詞から順序に述べる。(紙幅の関係で事例を充分あげられないので、意味は必ずしも細分しないでおく。)

【終助詞】

ね 2歳0カ月に初出、2歳1カ月までに多出するので、このころにはほぼ習得できるものと観察される。(以下、この意味のことを、) (2・0-2・1と略記する。)

- イーネー、タツツ？(ズボンのこと。2・0)
- カイトネ コレ。(2・1)
- チッチャイノネ。(2・1)

の 2.0—2.1

○イー[○]? ター[○] タ イー[○]? ホー[○]タイ イー[○]? (2.0)

○デ[○]ナイ[○]。(おし[○]こが。2.1)

て (依頼) 2.0—2.1

○モ[○]ッ[○]テ。モ[○]ッ[○]テ。(と、箱をよこす。2.0)

○カ[○]イ[○]テ[○]ネ コレ。(2.1)

よ 2.1

○チ[○]ョ[○]ー[○]ダイ[○]ヨ。チ[○]ョ[○]ー[○]ダイ[○]ヨ, コレ。(紙を。2.1)

○マ[○]ダ[○]ヨ[○]ー。(2.1)

や 2.1

○チ[○]ッ[○]チャ[○]イ[○]ヤ。(2.1)

○カ[○]ゴ[○]ミ[○]ール[○]ヤ。(見[○]える。2.1)

わ・わね・わよ 2.1—2.3

○ヤ[○]ブ[○]イ[○]チャ[○]ウ[○]。(2.1)

○タ[○]コ[○]サン イ[○]ル[○]ワ[○]ネ。(沢[○]山。2.2)

○フ[○]タ[○]ツ[○]アル[○]ワ[○]ヨ。ミ[○]ツ[○]アル[○]ワ[○]ヨ。(2.3)

か 2.1—2.6 (2歳1カ月に初出があるが、その後)
とだえ、2歳6カ月に多出する。)

○コ[○]コ[○]カ[○]ー。(2.1)

○イ[○]タ[○]イ[○]デ[○]ス[○]カ。(2.6)

○モ[○]ヒ[○]ト[○]ツ[○]ア[○]ゲ[○]マ[○]シ[○]ョ[○]ー[○]カ。(2.6)

かな 2.2

○ヤ[○]ロ[○]ー[○]カ[○]ナ[○]ァ。ド[○]ロ ヤ[○]ロ[○]ー[○]カ[○]ナ[○]ァ。(2.2)

○タ[○]ツ[○]カ[○]ナ[○]? コ[○]レ[○]モ タ[○]ツ[○]カ[○]ナ[○]? (松[○]葉[○]を[○]モ[○]グ[○]ラ[○]の[○]土[○]の[○]山[○]に[○]立[○]て[○]て[○]み[○]る。2.2)

な (感動) 2.2—2.3

○ア[○]カ[○]チ[○]ャ[○]ン[○]ガ[○]キ[○]タ[○]ヨ。ア[○]カ[○]チ[○]ャ[○]ン[○]ガ[○]キ[○]タ[○]ヨ。イ[○]ッ[○]パ[○]イ[○]ク[○]ル[○]ナ。(2.2)

○タ[○]ベ[○]タ[○]イ[○]ナ ュ[○]ッ[○]テ[○]ル。(2.3)

ぞ 2.2—2.7~8 (2歳2カ月で、父のことばをまね)
しておぼえ、7~8カ月に多出。)

○ト[○]ラ[○]ク[○]ガ[○]ク[○]ル[○]ゾ[○]ー。……ス[○]ク[○]ー[○]タ[○]ー[○]ガ[○]キ[○]タ[○]ゾ[○]ー。……ア[○]ム[○]ナ[○]イ[○]ゾ[○]ー。ア[○]ム[○]ナ[○]イ[○]ゾ[○]。ア[○]ム[○]ナ[○]イ[○]ゾ。(あ[○]ぶ[○]な[○]い[○]ぞ。2.2)

○ト[○]ル[○]ト[○]イ[○]タ[○]イ[○]ゾ。(2.7)

○ア, コ[○]レ カ[○]イ[○]テ[○]アル[○]ゾ。(2.8)

のよ 2.3 (「の」と「よ」を覚えてから初出)

○ハクノヨ。コッチ ハクノヨ。(2・3)

かしら 2・5

○へビカシラ。へビカシラネ。(2・5)

○ノコギリデ キレルカシラ?(2・5)

てば 2・7

○ブチッコ スルー。ブチッコスルー。ブチッコ スルッテパー。ブチッコスルー。
ブチッコ スルッテパー。ブチッコ シヨオッテパー。(2・7)

○オテテ チョット ドイテッテパー。(2・7)

もん 2・7

○ココニ コーユウノ カイテ イインダモン。(2・7)

○コレ ミチャイヤヨ。クラクテクラクテミニエナイモン。コレジャクテミニエ
ナイモン。ダメヨ。(本を読むとき、母が頭を出すと、暗くて読めない。2・7)

な(命令・依頼) 2・7—2・8

○モット カミ クダサイナ。(2・7)

○ママモ イカナ。(行きな、の変形。2・8)

けど 2・7—2・11

○コレガ コンナニナッチャッタデスケド。(2・7)

○ゲタダト ヨクヤレルケド。(2・11)

なきゃ 2・8

○ハンブソニ シナキヤ。(2・8)

○ビン アケナキヤ。(2・8)

じゃないか・じゃない・じゃないの 2・8—3・0

○ソレジャ コッチ ヤレバ イイジャナイカ。(2・8)

○ホラ、シッテルジャナイ。(2・8)

○オウチエ ダイドロコエ コオユウノガ アルジャナイノ。(3・0)

かもしれない 2・8—2・10

○ミンナガ トビアガルカモシレナイ。(2・8)

○キレーニ ヤルカモシレナイネ。(2・9)

○ココニ モジイタ ハイッテルカモシレナイヨ。(2・10)

かい 2・9

○ハイタツガ チガッタノカイ?(2・9)

こと 2・11

○オオ スゴイ^〇コト。オオ スゴイ^〇コト。(2・11)

だって 2・11

○ホラ、アカイトリガイル。ポッポッポ チュンチュンチュンダッ^〇テ。(2・11)

のに・ていうのに 2・11—3・0

○アタシニ コレ キツテクダサレバヨカッタ^〇ノニ。(2・11)

○ヨンデッ^〇テイウ^〇ノニ。(3・0)

【格助詞】

の(準体) 2・1

○オオキイ^〇ノ。(バスの絵を小さく書いてやったら、大きいのを書け、の意。2・1)

○コレ。マン^〇ユミ^〇チャン^〇ノ？(2・1)

と 2・1—2・2

○ママト^〇、ママト^〇。エーン。(母がズボンを取りに立って、妹のそばをはなれたら。一緒に行く、の意。2・1)

○ママト^〇イク。ママト^〇イク。(2・1)

○ブーブト^〇 ジテン^〇シャ ミテクル。(2・2)

は(主格) 2・1—2・2

○シャツワ^〇ー？(2・1)

○ツルワ^〇ー コウ。ツルワ^〇。(折り紙。2・1)

○グルマ。グルマ。コッチワ^〇モッテル。コッチワ^〇ママガ……。 (2・2)

の(所属・性質) 2・2

○キイロイ^〇ノ ハナ。(2・1)

○セーター アムナ^〇。アムナ^〇 セーター。(アムナとは、「はるみ」の幼児音。2・2)

○ババ^〇ノ ブドン。(ズボンの幼児音。2・2)

から 2・2

○コッカ^〇ラ^〇ダ、コッカ^〇ラ^〇ダ。(ここからの意。2・2)

○コッチカ^〇ラ^〇キテヨ。コッチカ^〇ラ^〇キテヨー。(2・2)

へ 2・2

○アッタネー、ソトエ。(2・2)

○ドコエヤローカナ。ドコエ。(2・2)

が 2・2

- コレガ[○] アッタヨ一。(2・2)
- クモガ[○] イルヨ。クモガ[○] イルヨ。(2・2)

で 2・2—2・3

- ブーランブーラン。ブーランブーラン。ブーランブーラン。コッチデ[○]。コッチデ[○]。
コッチデ[○]。(ぶらんこをこっちでやる、の意。2・2)
- オリガミデ[○]アソソデルトコ。(2・3)

に 2・2—2・4

- ココニ[○] イルンダヨ一。(2・2)
- オウチニ[○] イコウ。(2・3)
- ママニ[○] ミセテアゲル、コレモ。(2・4)

より 2・3—2・4

- ハルミチャンヨ[○]リチッチャイヤ。(2・3)

を 2・3—2・4

- ナニヲカコーカ、ハルミチャン、ン? (2・3)
- ドロヲキッタノ。ドロヲキッタノ。(2・4)

て 2・3—2・5

- クルーッテ? クルーッテ? (風がふくとまわる。2・3)
- ワッショイワッショイッテモッテイコー。(2・4)
- ニガシテッテユッテル。(2・5)

まで 2・5—2・7

- フモトマデ[○]タカイノ。(2・5)
- テンジョーマデ[○]トドイタ。(2・7)

【接続助詞】

て 2・2—2・3

- モッテアゲル。(2・2)
- コレモッテ[○] ヨーチエンニイキマシヨ。(2・3)

ても 2・2—2・6

- ハルミチャンモノッカッテモイイ? (2・2)
- クルマガゴコヤッテモダイジョブ? (2・6)

から 2・3

- オオキイカラ[○]トドク。(2・3)

○デヨ一、アメフツテルカラ。ソトニデヨ一。(2・3)

たら 2・3—2・4

○オッコッチャッタラヤダヨ。(2・3)

○マタコロンダラアカチンツケテネ。(2・4)

ば 2・4

○コーヤレバイタクナイ。(2・4)

○オッキクキレバイイノ。(2・4)

と 2・4

○ハダシデイルトイヌガクル?(2・4)

○ソーヤルトイタクナッチャウノ。(2・4)

ちゃ 2・5—2・6

○ヤダ、ツクッチャヤダ。(2・5)

○ママ、カケチャダメヨ。(2・6)

たり 2・5—2・6

○ソッチイッタリ、コッチイッタリ。(2・5)

○オテンキニナッタリ、クモッタリ。(2・6)

ながら 2・5

○ココカキナガライッテアゲルカラ。(2・5)

て(「ても」の意) 2・8

○ゴホンニウマカイテイインダモン。(2・8)

けど 2・11

○サッキヤネノウエトリガトマッテタンダケド、モウイッチャッタ。(2・11)

し 3・0

○ココニモイナイシ、ココニモイナイシ?(3・0)

【副助詞】

も 2・2

○ハルミチャンモツケル。(メンソレを。2・3)

○アレモケムシ。フタツモケムシヨ。(2・2)

だけ 2・2—2・3

○サルモ一ワンワント一……サルト一ワンワント……ニャーニャトソイダケ。

ソイダ[○]ケンダ[○]。(それだけだ。2・2)

○パバノ? ミテルダ[○]ケ[○]。(いたずらはしない。2・3)

は 2・2—2・3

○コンドワ[○] ココ。(2・2)

○スワルワ[○]? コーヤッテスワルワ[○]? (すわってやれば?の意。2・3)

でも 2・3—2・4

○ノレナイ, コレデ[○]モ[○]。ノレナイ。(2・3)

○イツデ[○]モソレガイルノ。ハルミチャンノオウチニ。(2・4)

だか 2・3—2・5

○ナンダ[○]カ[○] ナイタ。(へいの向こうで子どもが泣いた。2・3)

○ヒトツ スミレダ[○]カ[○]。(2・5)

しか 2・3—2・10 (2歳3カ月で、「ヒトツカ」「スコシカ」
などの形で初出。10カ月で多出。)

○ヒトツカ[○] イナイ。(2・3)

○モーヒトツシカ[○]ナイ。(2・10)

なんか 2・4—2・8 (2歳4カ月で初出。
8カ月以後に多出。)

○インナ[○]ンカ[○]ヤル, ココ。(2・4)

○アタシナ[○]ンカ[○] クツシタ スイデル。(2・8)

なら 2・5

○インナ[○]ラ[○] ダイジョ[○]ブヨ[○]。(2・5)

○チッチャ[○]イセミナ[○]ラ[○] ハイル? (2・5)

なんて 2・5

○ネコナ[○]ンテ[○] ドロアソビスル? (2・5)

○セミナ[○]ンテ[○] ココニ ノルカシラ。(2・5)

ずつ 2・1—2・6 (2歳1カ月で誤用初出。
6カ月以後に多出。)

○トリ……トツズツ……モーイナイ。(2・1)

○イッポンズツ[○]? イッポンズツワ[○]ドーダ? イッポンズツワ[○] コー? (2・6)

だって 2・7—2・8

○ドウダ[○]ッテ[○] イインダ[○]ヨ[○]。(2・7)

○アタシダ[○]ッテ[○]オカアサンダカラ。(2・8)

って 2・7

○ヨコスベリ[○]ッテ[○] コー? (2・7)

か 2・0—2・7 (2歳0カ月で、固定型が初出。7カ月以後に多出。)

○ナンカ。ナンカ。(2・0)

○オンナジカドウカ ヤッテミヨ。 (2・7)

くらい 2・8—2・9

○コノクライナラ、ダイジョブ? (2・8)

○コレモ ハイノ、マシミチャングライニ。(2・9)

ばっかし 2・11

○オテテパッカシ。(2・11)

きり 2・11

○ヒトツキリヤッテカラ イク。(2・11)

とも 3・0

○コレ ココダケ デキチャッタ。フタツトモ。フタツトモ。(3・0)

以上、語によっては、固定期のわからないものもある。以上に述べた習得状況を一覧表にまとめると、だいたい次のページのようになる。

二三の特質

以上、ごくざっと習得の順序と語例および文例をながめてみたが、これらを含め、全体の記録を通じて、二三、気のついた点を簡単に述べておく。

- (0) だいたい満3歳までには、おもな助詞は、ほぼ習得できると見られる。
- (1) 助詞は、いくつかの例外を除いて、だいたい、初出から1—2か月のあいだにほぼ身につけることができるようである。
- (2) 概して、終助詞・格助詞の習得が早く、接続助詞が、これにつき副助詞がいちばん遅いようである。
- (3) わたしは、かつて、助詞の日常使われる度合の多いものを調べたことがあるが(註4)、それと比べると、日常使用されることの多い助詞ほど、幼児も早く習得する傾向があるように見うけられる。
- (4) 格助詞「で」には、誤用が多い。固定するまでには、かなりの用法のゆれがある。
- (5) 格助詞「を」は、おとなの話しことばでも、欠除することが少なくない

年齢 助詞	2歳0月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	3歳0月
終助詞	ねのて	やわが	がな なと	のよ	がしら	てば もん けど	なきゃ かもしれない じゃないか	かい	こと だって のに				
格助詞	ら ら ら ら ら	(運法) から へ が に	より まで	まで									
接続助詞	て ても	から たら	ば と	あい たり ながら?				て?					
副助詞	も だけ は	ごと たが しが	なんが なら なんて										
助詞							ずつ	だて って? か	くらい				はがし? さり? とと?

- 初出から固定までを——助詞——の形で表わす。○ ? は固定時期不明を表わす。
- ----- は初出はあっても、空白、または、誤用などのゆれのある時期を表わす。

ので、「と」や「の」や「が」などに比べて、習得が遅れるものと思われる。そのせいか、初期には、「を」と表現すべき個所に誤用が時々現われる。

- (6) 「赤い^の花」というような言い方は、幼児に一般的な言い方（誤用）と見られるが、これは、準体助詞の「の」が固定し、多用されたあとで急に多く現われてくるところから見て、準体助詞の「の」からの発達と考えられる。
- (7) 「から」「けど」などの接続助詞は、初期には、終助詞的な用法が多出し、文中に位置して、文と文とを接続する用法のほうがおそく固定するようである。
- (8) 接続助詞のうちでは、順接のものほうが、逆接のものより、習得が早い。
- (9) 助詞だけでなく、助動詞（「——なさい」「——でしょう？」など）・形式名詞（「ほう」「ぶん」など）・接続詞（「だから」「だけど」など）を含めて一緒に考えると、もっと幼児の言語習得の特質がはっきりすると思われる。その意味でも、これは序論にすぎない。

(注1) 愛育研究所編『幼児の言語発達』(昭18)

(注2) 永野賢「幼児のことばの誤りについて——活用の習得過程における法則性一」(『児童心理』昭32・8月号)

(注3) 同上。

(注4) 国立国語研究所報告4『現代語の婦人雑誌の用語』(昭28)
永野賢『学校文法概説』(昭33)

〔付記〕

わたしがふたりの娘のことばについてとった記録は、いわゆる喃語（ナンゴ）を発生はじめた時期から、姉が5歳4か月、妹が4歳の時まで、あいだに多少のとぎれはあるが、続けられた。その中で、とくに、妹の2歳——3歳の13か月間、毎月延べ5時間ずつ、その時間内のすべてのことばを記録したのは、この年齢が文法能力の発達状況を見るのに、おもしろい問題を多く含んでいると考えたからである。

まえがきに書いたように、牛島・森脇両氏の研究では、活用の能力が2—3歳のころに著しく発達し、3歳児では十分に使い分けられるとのことであり、わたしの観察（前記論文）でも、変形の現象という角度から見て、そのことを、裏づけたわけである。本論の、助詞の習得状況の観察でも、同じく、2—3歳の時期が発達の著しい年齢であ

ることがわかったわけであり、この時期の言語発達の細かな分析をすることにより、いろいろと興味のある事がらが引きだせるのではないかと思う。

ちなみに、牛島・森脇両氏の『幼児の言語発達』には、次のように述べられている。

(P. 21)

(前略) 一歳児は「よ、ね、は、のね、のよ、へ」等を少し使用し始めて居るが、大部分の助詞は用ひられて居らず、二歳児になって用ひ始められてをる。而して三歳児になると甚しく増加し、其後の変化は著しくなく、或ものは却って減じてをる(も、から、のね、のよ)位である。故に茲に於ても、動詞の活用の場合に見られたのと同様な発達関係が見られ、助詞の使用も三歳児に於て一応出来上ると云ふ事が出来よう。(後略)